


受賞者氏名	小口 雅史	
所属	文学部史学科	
受賞年月日	2020年11月4日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	青森県	
受賞名	第62回青森県文化賞	

受賞(研究)内容詳細

受賞者は1985年に弘前大学人文学部に奉職をしたのを契機に、日本古代中世期における北方史研究の開拓に取り組んできた。その当初は地元においてすら、津軽の歴史は「縄文（文化の華である亀ヶ岡）から（乱世の英雄）津軽為信へ」というのが津軽の歴史であると公然と語られているくらい、文献史学による古代中世北方史研究は空白であった。一方で文献史学の欠を埋めるべき考古学による北方史研究の蓄積は厚かった。文献史学においては、北方史といっても「蝦夷」の歴史であって、それは文献に蝦夷が見える秋田から岩手県南部までの歴史（所謂北緯40度以南の世界！）に過ぎなかったのである。

しかしながら北緯40度以北に人が居なかったわけではない。さらにいえば津軽海峡は自然や植物の境界線であったとしても文化の境界線ではない。人は自由に本州北端と北海道を行き来していたことは、豊富な考古遺物から明らかである。さらにそれを前提とすると、文献史料の中にも様々な痕跡があることに気づいたのである。

そうした北緯40度以北の世界は、中央には存在しない、しかしながら欠かすことの出来ない、豊かな北の富の供給地であったことも明らかになってきた。そこは単なる辺境ではなく、むしろ独自の輝いた世界なのであって、日本文化の多様性を保証する（単一民族論を明確に打破する）重要なフィールドであった。

この豊かな北の世界が日本文化に飲み込まれるのは豊臣秀吉による天下統一である。受賞者はそこに至るまでの北方の古代中世史を様々な切り口から研究してきた。残存する文献史料が少ないことから考古学との連携は必須であり、また情報処理技術による様々なデータの分析も必要であった。

受賞者は1996年に法政大学に異動したが、その後も10年近く青森を拠点として研究しながら東京勤務を続け、後に東京に拠点を移してからも絶えることなく現在に至るまで北方史研究に従事することとなった。

その間、そうした北方史研究の成果を広く世に還元するために多くの自治体史編纂を主導した。戦後県史を刊行していなかった数少ない県の一つである青森県において、全36巻となる青森県史を20年以上の歳月をかけて完成させ、今もそのデジタル公開に関与している。また弘前市史、五所川原市史、浪岡町史、青森市史といった県内各地の自治体史も刊行した。これが今回の直接の受賞理由ではあるが、受賞に際しては、そのベースにある、様々な研究蓄積も挙げていただいた。一つは津軽安藤氏研究である。これはそれまで根拠を必ずしも明示しない郷土史研究の一つに過ぎなかった対象であるが、そうした郷土史研究を踏まえながらも関連史料を博搜して新しい光を当てることとなった。日の本将軍安藤氏の足跡は、北日本中世史の解明にも重要な素材となった。また津軽曾我氏の研究も、関係史料群をあらためて再構成することによって北条得宗領の研究に重要な一石を投じることとなった。

また考古学との連携では、北緯40度以北にのみ存在する古代防御性集落の研究の進展に努めたことも評価していただいた。これは文献には全く記載されていない事実であるが、その歴史的意味づけをめぐって現在進行形で研究中である。さらにその形態分析のために航空レーザ計測方法の有効性も実証できた。防御性集落はその防御目的のために地上での踏査が困難な場所に置かれることが多く、空からの計測は研究を一気に進行させる可能性を秘めている。

その他、ガラス玉を中心とした大陸沿海地方からサハリン、北海道、本州を繋ぐ物資の流通研究もとりまとめの最終段階に入っている。古代の物資流通上における秋田城の役割も解明することが出来た。

以上のようにこれまで日の当たらなかった北方古代中世史に新しい光を当てたことを総合的に評価していただいたことによる受賞となった。